

慶應義塾図書館所蔵大塩中斎批注大学について

永 富 青 地

慶應義塾図書館に所蔵される江戸中期刊『大学 附大学問』（『慶應義塾図書館和漢貴重書目録』〔慶應義塾大学図書館出版会株式会社、二〇〇九〕一二六頁に、「大塩中斎書入本」として著録）には、大塩中斎（平八郎、寛政五年一月二十二日、一七九三年三月四日～天保八年三月二十七日、一八三七年五月一日）による、主として朱筆、一部墨筆による、王守仁の『大学』の注釈と、それに対する批注とが記されている¹。明治期になって刊刻された、「掬水洞蔵版」と称する『古本大学旁註』（最も広く流布しているものとしては、明治二十九年〔一八九六〕十二月十三日発行の鉄華書院刊本がある。なお、中斎自身は、王守仁による『大学』の注釈を『大学古本旁註』と称している）は、慶應義塾図書館蔵の本写本に基づくものと思われるが、本文中の傍注について、「王子曰」と「大塩後素曰」として王守仁の傍注と大塩中斎によるそれとを区別している。しかしながら実際は、『百陵学山』所収の『大学古本』（以下、「学山本」と略称）²と、『函海』所収の『大学古本旁註』（以下、「函海本」と略称）³との字句の相違に関する、大塩中斎によるごくわずかの校異を除くならば、傍注はほとんど全てが王守仁のものであり、鉄華書院刊『古本大学旁註』によるこの区別は、後人によって附された誤ったものであることは明らかである。その一方で、鉄華書院刊本には、慶應義塾図書館蔵の本写本に附されている大塩中斎による頭注は全く収録されていない。このように、王守仁の大学解釈に対する大塩中斎の理解を知る上で不可欠の一次資料である本写本は、残念ながら今日までその真の姿が全く知られていない事となったのである。本稿においては、このような現状に鑑み、慶應義塾図書館蔵の本写本における頭注および傍注の忠実な翻刻を試みたものである。その際、読者の理解に資するため、書き下し文を附するとともに、該当する注に対応する『大学』の本文を併記しておいた。翻刻に際しては細心の注意を払ったが、なお誤りの残ることを危惧するものである。博雅の叱正を賜ることができれば、喜びこれに過ぐるものはない。なお、紙幅の関係で、本書の内容に関する論述は別稿に譲ることとした⁴。

古本大学序

二丁裏

〔本文〕

去分章而復旧本、傍為之釈以引其義。

〔頭注〕 釈什誤。

【書き下し文】

釈は什の誤り。

大学

三丁表

[題下注] (墨筆)

此傍訓者百陵学山中所載也。校訂以李氏涵海中之傍訓、而涵海之本字不足。

【書き下し文】

此の傍訓は百陵学山の中に載する所なり。校訂は李氏涵海中の傍訓を以てす、而れども涵海の本の字、足らず。

三丁表

[本文]

大学之道、

[傍注]

明明徳親民、猶脩己安百姓。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

明徳を明らかにし民を親むは、猶ほ己を脩めて百姓を安んずるがごとし。

三丁表

[本文]

在明明徳、在親民、在止於至善。知止而后有定、

[傍注]

明徳親民無佗、惟在止於至善、尽其心之本体、謂之止至善。○心之本体、知至善惟在于吾心、則求之有定向。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

徳を明らかにし民を親むは佗無し、惟だ至善に止まり、其の心の本体を尽すに在りて、之れを至善に止まると謂ふ。○心の本体、至善を知ること惟だ吾が心に在れば、則ち之れを求むるに定向有り。

[傍注への傍注] (墨筆)

○至善者、(王守仁の傍注の筆写時の欠落の補足。「心之本体、知至善惟在于吾心、則求之有定向」の冒頭)

【書き下し文】

至善なる者は、

[傍注への傍注] (墨筆)

親愛也。(王守仁の傍注) 涵海古本。

【書き下し文】

親は愛なり。涵海古本。

[頭注]

王汝中説、大学之道、至止於至善、即本体以為工夫、聖人之学也。悟時只止至善一句、已是道尽矣。

【書き下し文】

王汝中説く、大学の道は、至善に止まるに至りて、本体に即して以て工夫を為すは、聖人の学なり。悟る時は只だ至善に止まるの一句、已に是れ道（い）ひ尽せり、と。

三丁表

[本文]

知止而后有定、定而后能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得。

[頭注]

知止至能得、此用工夫以収其本体。賢人之学也。悟得時知止二字、亦已是道尽。

【書き下し文】

止まるを知り能く得るに至るは、此れ工夫を用ひて以て其の本体を収む。賢人の学なり。止まるを知るの二字を悟り得る時、亦た已に是れ道（い）ひ尽す。

三丁表～裏

[本文]

物有本末、事有終始。知所先後、則近道矣。

[頭注]

物有本末、事有終始以下、以示学者用功之序。近道云者、与道猶有二、兼云于能得也。此是困却困勉の工夫、以求其本体学者之事也。本體工夫、浅深難易、若有聖賢学者之不同、及其知之成功一也。下二段正是得言先後工夫之条件。

【書き下し文】

物に本末有り、事に終始有りより以下は、以て学者、功を用ふるの序を示す。道に近しと云ふは、道と猶ほ二有るがごとくにして、兼ねて能く得るを云ふなり。此れは是れ困却困勉の工夫にして、以て其の本体を求むる学者の事なり。本體の工夫は、浅深難易、聖賢学者の同じからざる有るが若きも、其の知の功を成すに及びては一なり。下の二段は正に是れ先後する工夫の条件を言ふを得たり。

三丁表

[本文]

古之欲明明徳於天下者、先治其国。

[傍注]

明明徳于天下、猶堯典克明峻徳以親九族、至協和万邦。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

明徳を天下に明らかにするは、猶ほ堯典の克（よ）く峻徳を明らかにして以て九族を親しむより、万邦を協和するに至るがごとし。

[傍注の傍注]

涵海古本無之。(墨筆)

【書き下し文】

涵海古本に之れ無し。

三丁裏

[本文]

欲脩其身者、先正其心。

[傍注]

心者身之主。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

心は身の主なり。

三丁裏

[本文]

欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。

[傍注]

意者心之発、知者意之体、物者意之用。如意用于事親、即事親之事格之、必尽夫天理、則吾事親之良知、無私欲之間、而得以致其極。致知則意無所欺而可誠矣。意誠則心無所放而可正矣。格物如格君之格、是正其不正以歸于正。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

意は心の発、知は意の体、物は意の用なり。如し意、親に事ふるに用ふれば、親に事ふるの事に即して之れを格（ただ）し、必ず夫の天理を尽さば、則ち吾が親に事ふるの良知は、私欲の間（へだて）無く、而して以て其の極を致すを得たり。知を致さば則ち意、欺むく所無くして誠なるべし。意誠なれば則ち心、放つ所無くして正なるべし。物を格すは君を格すの格の如くにして、是れ其の不正を正して以て正に歸するなり。

[頭注]（墨筆）

涵海傍訓有少異。

致知、致吾心之良知也。格物、格正事物也。(王守仁の傍釈) [但し、王守仁は「格物」以下を、「格物、格正物事也」に作る]

【書き下し文】

涵海の傍訓は少しく異なる有り。

知を致すとは、吾が心の良知を致すなり。物を格すとは、事物を格正するなり。

四丁表

[本文]

其本乱而未治者否矣。其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

[傍注]

其本則在脩身、知脩身為本、斯謂知本、斯謂知之至。然非実能脩其身者、未可謂之知脩身也。脩身惟在誠意、故特揭誠意、示人以脩身之要。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

其の本は則ち身を脩むるに在り、身を脩むるを知るを本と為す、斯れを本を知ると謂ひ、斯れを知の至りと謂ふ。然らば実に能く其の身を脩むる者に非ざれば、未だ之れを身を脩むるを知ると謂ふべからざるなり。身を脩むるは惟だ意を誠にするに在り、故に特に意を誠にするを掲げて、人に身を脩むるの要を以て示す。

四丁表

[本文]

所謂誠其意者、毋自欺也。

[傍注]

誠意只是慎独、工夫在格物上用、猶中庸之戒懼也。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

意を誠にするは只だ是れ独りを慎み、工夫は格物の上に在りて用ひ、猶ほ中庸の戒懼のごときなり。

四丁表～裏

[本文]

故君子必慎其独也。

[傍注]

君子小人之分、只是能誠意与不能誠意。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

君子小人の分は、只だ是れ能く意を誠にすると意を誠にすること能はざるとなり。

四丁裏

[本文]

此謂誠於中、形於外。

[傍注]

此猶中庸之莫見莫顯。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

此れ猶ほ中庸の見（あら）はるるは莫く顯（あきら）かなるは莫きがごとし。

四丁裏

[本文]

十目所視、

[傍注]

言此未足為嚴、以見独之嚴也。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

此れ未だ嚴しきと為すに足らざるを言ひ、以て独りの嚴しきを見（あら）はすなり。

五丁表

[本文]

故君子必誠其意。詩云、瞻彼淇澳、

[傍注]

誠意工夫、実下手処、惟格物。引詩言格物之事。此下言格致。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

誠意の工夫は、実に手を下す処は、惟だ格物のみ。詩を引きて格物の事を言ふ。此の下は格致を言ふ。

五丁表

[本文]

有斐君子、如切如磋、

[傍注]

惟以誠意為主、而用格物之工、故不須添一敬字。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

惟だ誠意を以て主と為して、而して格物の工を用ふ、故に一の敬の字を添ふるを須（もち）ひず。

五丁表

[本文]

如切如磋者、道学也。

[傍注]

猶中庸之道問学尊徳性。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

猶は中庸の問学に道（よ）り徳性を尊ぶがごとし。

五丁表

[本文]

赫兮喧兮者、威儀也。

[傍注]

猶中庸之肅明盛服。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

猶は中庸の肅明盛服のごとし。

五丁裏

[本文]

道盛徳至善、民之不能忘也。

[傍注]

格致以誠其意、則明德止于至善、而親民之功、亦在其中矣。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

格致以て其の意を誠にすれば、則ち明德は至善に止まり、而して親民の功、亦た其の中に在り。

五丁裏

[本文]

於戲前王不忘。君子賢其賢、

[傍注]

明德親民只是一事。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

明德親民は只だ是れ一事なり。

五丁裏

[本文]

而利其利。此以沒世不忘也。

[傍注]

親民之功、至於如此、亦不過自用其明德也。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

親民の功、此の如きに至るも、亦た自ら其の明德を用ふるに過ぎざるなり。

五丁裏

[本文]

克明德

[傍注]

又説歸身上。(王守仁の傍注) (「身」の右に「脩」の墨筆あり)

【書き下し文】

又た身上に歸するを説く。

五丁裏

[本文]

皆自明也。

[傍注]

自明不已、即所以為親民。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

自ら明らかにして已まざるは、即ち民に親しむを為す所以なり。

六丁表

[本文]

詩曰、周雖旧邦、其命維新。

[傍注]

孟子告滕文公養民之政、引此詩云、子力行之、亦以新子之國。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

孟子、滕の文公に民を養ふの政を告げ、此の詩を引きて云ふ、子、力めて之れを行へば、亦た以て子の國を新たにせん、と。

六丁表

[本文]

是故君子無所不用其極。

[傍注]

君子之明德親民、豈有佗哉。一皆求止於至善而已。（王守仁の傍注）

【書き下し文】

君子の徳を明かにし民に親むは、豈に佗有らんや。一に皆な至善に止まるを求むるのみ。

六丁表

[本文]

可以人而不如鳥乎。詩云、穆穆文王、

[傍注]

止於至善、豈外求哉。惟求之吾身而已。（王守仁の傍注）

【書き下し文】

至善に止まるは、豈に外に求めんや。惟だ之れを吾が身に求むるのみ。

六丁表

[本文]

為人君止於仁、

[傍注]

又説歸身上。（王守仁の傍注）

【書き下し文】

又た身上に歸するを説く。

六丁裏

[本文]

子曰、聽訴吾猶人也。必也使無訴乎。

[傍注]

又即親民中聽訴一事、要其極、亦皆本於明德、則信乎以脩身為本矣。又説身上。（王守仁の傍注）（「説」の字の下に墨点）

【書き下し文】

又た親民の中の訴を聴くの一事に即して、其の極を要（もと）むるに、亦た皆な明德に本づけば、則ち信（まこと）なるかな身を脩むるを以て本と為すとは。又た身上に説く。

[傍注の傍注]

○歸。（王守仁の傍注の筆写時の欠落の補足）（墨書）

【書き下し文】

歸するを。

六丁裏

[本文]

所謂脩身在正其心者、身有所忿懣、

[傍注]

脩身工夫只是誠意、就誠意中体当自己心体、常令廓然太公、便是正心。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

身を脩むるの工夫は只だ是れ誠意、誠意の中に就（つ）きて自己の心体を体当し、常に廓然太公ならしむれば、便ち是れ正心なり。

[頭注]

昏明德不能親民者、在欲与私而已。而欲与私之義、乃挙于正心脩身之兩節。四意五僻、故某学之工夫在此四意五僻。先思焉。

【書き下し文】

明德を昏（くら）まし民を親しむこと能はざる者は、欲と私とに在るのみ。而して欲と私との義は、乃ち正心脩身の兩節に挙ぐ。四意五僻、故に某の学の工夫は此の四意五僻に在り。先づ焉れを思へ。

六丁裏

[本文]

則不得其正、

[傍注]

此猶中庸未發之中。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

此れ猶ほ中庸の未發の中のごとし。

七丁表

[本文]

則不得其正。心不在焉、

[傍注]

正心之功、既不可滯於有、又不可墮於無。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

正心の功は、既に有に滯るべからず、又た無に墮つるべからず。

七丁表

[本文]

而辟焉。之其所賤惡而辟焉。

[傍注]

人之心体、惟不能廓然太公、是以随其情之所発而辟焉。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

人の心体は、惟だ廓然太公なること能はず、是を以て其の情の発する所に随ひて焉れを辟す。

七丁裏

[本文]

之其所哀矜而辟焉。

[傍注]

此猶中節之和。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

此れ猶ほ節に中るの和のごとし。

七丁裏

[本文]

故好而知其惡、

[傍注]

能廓然太公而随物順応者鮮矣。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

能く廓然太公にして物に随ひて順応する者は鮮(すくな)し。

八丁表

[本文]

而成教於国。

[傍注]

又説歸身上。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

又た身上に歸するを説く。

八丁表

[本文]

如保赤子、

[傍注]

親民。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

民に親しむ。

八丁表

[本文]

心誠求之、

[傍注]

只是誠意。(王守仁の傍注) (墨書)

【書き下し文】

只だ是れ誠意。

八丁表

[本文]

一国作乱。

[傍注]

又説歸身上。(王守仁の傍注) (墨書)

【書き下し文】

又た身上に歸するを説く。

八丁裏

[本文]

是故君子有諸己而后求諸人、

[傍注]

又説歸身上。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

又た身上に歸するを説く。

八丁裏

[本文]

所蔵乎身不恕、

[傍注]

只是誠意。(王守仁の傍注) (墨書)

【書き下し文】

只だ是れ誠意。

九丁表

[本文]

宜其家人。宜其家人、

[傍注]

宜家人兄弟与其儀、不忒只是脩身。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

宜しく家人兄弟と其の儀を与にすべくして、忒(たが)はざれば只だ是れ脩身なり。

九丁裏

[本文]

所謂平天下在治其国者、

[傍注]

又説帰身上。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

又た身上に帰するを説く。

九丁裏

[本文]

上老老而民興孝、

[傍注]

親民。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

民に親しむ。

九丁裏

[本文]

是以君子有絜矩之道也。

[傍注]

工夫只是誠意。(王守仁の傍注)(墨書)

【書き下し文】

工夫は只だ是れ誠意。

十丁表

[本文]

民之所好好之、

[傍注]

只是誠意。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

只だ是れ誠意。

十丁表

[本文]

此之謂民之父母。

[傍注]

親民。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

民に親しむ。

十丁表

[本文]

有国者不可以不慎。

[傍注]

惟係一人之身。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

惟だ一人の身に係（かか）る。

十丁裏

[本文]

得衆則得国、

[傍注]

身脩則得衆。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

身脩まれば則ち衆を得。

十丁裏

[本文]

失衆則失国。

[傍注]

又説婦身上。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

又た身上に帰するを説く。

十丁裏

[本文]

是故君子先慎乎徳。

[傍注]

脩身為本。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

身を脩むるを本と為す。

十一丁表

[本文]

惟命不于常。道善則得之、

[傍注]

惟在此心之善否。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

惟だ此の心の善なるや否やに在り。

十一丁表

[本文]

惟善以為宝。

[傍注]

善人只是全其心之本体者。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

善人とは只だ是れ其の心の本体を全うする者なり。

十一丁表

[本文]

若有一个臣、

[傍注]

此是能誠意者。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

此れは是れ誠意を能くする者なり。

十一丁裏

[本文]

人之彦聖而違之俾不通、

[傍注]

是不能誠意者。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

是れ誠意を能くせざる者なり。

十二丁表

[本文]

不与同中国。

[傍注]

仁是全其心之本体者。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

仁は是れ其の心の本体を全うする者なり。

十二丁裏

[本文]

仁者以財発身、

[傍注]

能明德者則能親民。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

能く徳を明らかにする者は則ち能く民に親む。

十二丁裏

[本文]

未有上好仁而下不好義者也。

[傍注]

能明德則民親。(王守仁の傍注)

【書き下し文】

能く徳を明らかにすれば則ち民親しむ。

十三丁裏

[本文]

以義為利也。

〔傍注〕

又説到脩身上、工夫只是誠意。（王守仁の傍注）

【書き下し文】

又た身を脩むる上に到りて説かば、工夫は只だ是れ誠意なり。

〔頭注〕

終傍訓。学山無之、涵海有之。

【書き下し文】

傍訓を終ふ。学山之れ無し、涵海之れ有り。

【附記】本稿作成のための調査において、慶應義塾図書館の館員各位より多大なる援助を賜っている。特に感謝の意を表する次第である。

【本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号21K00056）による成果の一部である】

-
- 1 本書における朱筆、墨筆による批注は、大阪府立中之島図書館玄武洞文庫に所蔵されている、大塩中斎真筆であることが明らかな様々な書籍に対する批注との比較により、大塩中斎の真筆であることは明らかである。
 - 2 『百陵学山』は万暦十二年（一五八四）に、隆慶二年（一五六八）刊『丘陵学山』を増補して改名した叢書。
 - 3 『函海』は乾隆年間（一七三六～一七九五）刊行。なお、中国における『古本大学旁註』の刊行については、水野実「王守仁の『大学古本傍釈』の考察」（『日本中国学会報』第四十六号、一九九四）に詳しい。
 - 4 大塩中斎の王守仁『大学古本旁註』に対する全般的な見解に関しては、筆者の別稿である「佐藤一斎および大塩中斎による王守仁『大学古本傍釈』の受容―併せて佐藤一斎による「大学古本序」挿注を論ず―」（『東洋の思想と宗教』第四十号、早稲田大学東洋哲学会、二〇二三〔予定〕）を参照のこと。